



特集

博覧会を支える人達

1月15日に浅井三姉妹ゆかりの北近江・長浜の地にランドオープンして以来、多くの人々が訪れている江・浅井三姉妹博覧会。その人気を支えているのはこの博覧会に携わっている皆さんのスタッフです。

中には、ボランティアガイドや商工会、青年会議所、浅井中学校の生徒、広報で募集して集まった一般ボランティアなど、無償で、博覧会を盛り上げるために活動されている人たちもいます。

彼らを動かすものは何なのか。3人に話をうかがいました。

「最初に博覧会の話聞いた時に、地元之宝に光が当たる。多くの観光客が来てくれる。そしてこの地域の良さが全国に広まるチャンスだと思いました。」その時の興奮を嬉しそうに語ってくれるのは、浅井・江のドラマ館館長の吉川富雄さんと同館副館長の西橋榮次郎さん。

吉川さんは、現在70歳、会社役員をしながらドラマ館の運営に気を配り、西橋さん（68歳）も地元で店を経営しながらドラマ館を支えている。二人とも本業を抱えつつ、プライベートの時間を削り、労苦を厭わずスタッフとなった。その熱意と行動力から、とても選歴を超えた二人だと感じることができない。そこまでして、博覧会に携わろうと思っただきっかけは何なのだろうか。

年齢や性別を問わず参加しやすい環境を作りたいですね。」
たしかに、浅井会場にはあざい認定こども園の園児が描いた三姉妹のイラストが展示されていたり、休日には、浅井中学校の生徒によるおもてなし隊が活躍する。それもこれもみんな盛り上げようとの思いから企画されたもの。二人の根底にあるのも「郷土愛」だ。そんな二人が職務にあたるうえで気をつけていることは何か、日々の仕事内容とともにうかがった。

「スタッフの動きに目を配りながら、写真撮影、車の整理、ごみ拾いなど雑用をこなしています。決して難しい仕事ではないですよ。でも、スタッフ一人ひとりが気をつけているのは、相手の立場に立ったぬくもりある行動をとることです。今朝も朝礼で三方よしの話をしました。「お客さんよし、博覧会よし、スタッフよし」ですよ。」
では、二人の考えるおもてなしとは。
「笑顔でのあいさつはもちろんですが、例えば案内ひとつとってみても方向を指さすだけでなく、近くまで一緒するなどしています。「おもてなし」とはお客さんに気持ち良く帰ってもらうこと。この一言につきます。」
その心づかいが、全国から多くの人を呼び寄せ、またりピーターの獲得につながっている。4月18日現在で、博覧会の入場者数は、実に延べ26万6715人。当初予想の2倍である。



▲観光客を出迎える園児たちの力作



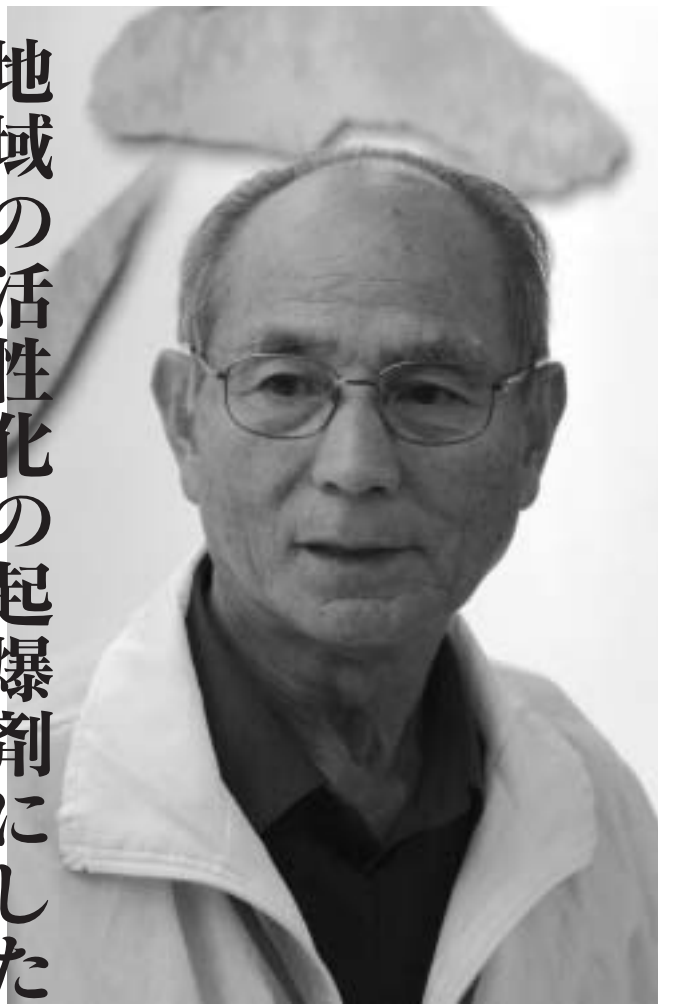
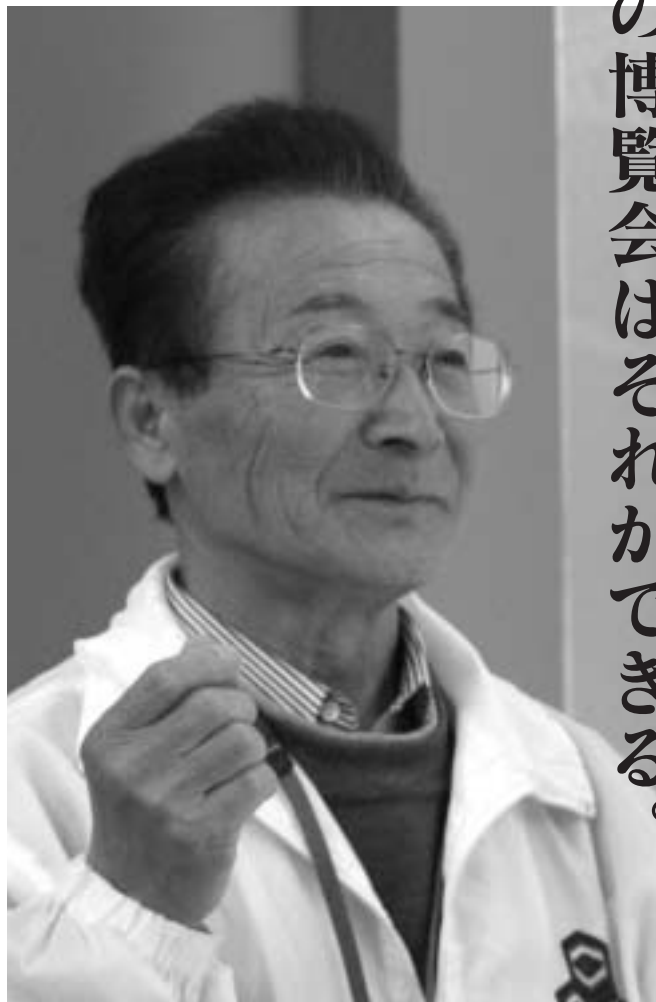
▲おもてなし隊とゆるキャラたち



▲賑わいを見せる館内

地域の活性化の起爆剤にしたい。
この博覧会はそれができる。

にしはし えいじろう さん
西橋 榮次郎 さん
(同館副館長)



よしかわ とみお さん
吉川 富雄 さん
(浅井・江のドラマ館館長)